おおうち歴史の散歩道

萩往還行程記（鰐石橋～柊）

萩往還

1 大内全域
江戸時代（近世）

慶長9年（1604）、萩城築城後、参勤交代道として開かれ、幕末には藩の吉田松陽や土佐の坂本龍馬など多くの志士が駆け抜けました。萩から防府までの全長53kmのうち、開石約9割までの4.5kmが大内地区を走っており、水上には一里塚、村ごとに建設運搬などの施設が置かれ、幕末の街道沿いには昭和20年頃まで往復駅が残っていました。

象頭山からの眺望

6 宮島町

その昔、ここは広保川と開田川が都野川と合流し山口湾に注ぐ船着場で海路交通の要衝でした。幕末には高杉晋作が「都石川の水は即ち西洋に到る」という大仕大立スケールの漢詩を詠んでいます。象頭山からの眺めは見て頂く価値は、明治18年（1885）、明治天皇行幸に際し、鰐橋から県内最初の近代的な鉄橋に架け替えられ天皇はいがらたたいらこどです。

外郎の元祖福田屋

7 御堀
江戸時代末（近世）

福田屋は山口外郎の元祖として、300年以上前から終戦前まで、現在の地で営業していました。ここは御成道街道に面しており、藩主の参勤交代、来山した文人墨客、興隆寺への参拝者などを多くの人々が訪れ、最盛期の幕末期には藩庁の役達手伝人、上山高大路（三田尻）などを役宅にした朝の一人、三条実美も立寄りました。建物は当時の面影を多く残しています。

御堀神社

9 御堀
1909年（近現代）

御堀の村社八幡宮、氷上の村社氷上神社、金成の村社鎮山神社、御堀の八幡宮の摂社鎮魂神社を合祭して、明治42年（1909）に御堀神社となりました。神殿と幣殿は八幡宮、拝殿と手水舎は氷上山王社、倉庫は鎮山神社、鳥居は鎮魂神社から、それぞれ移されたものです。

土饅頭

10 御堀
平安時代初期（古代）

御堀神商店の洪積層地下約10cmの所から、縄張石まとは径子石と6呼ばれる団塊が出てきます。直径は2～3cmで、球状でいち、断熱、流黄白色で粘に相当する部分は柔軟性です。これは大内氏の氷上山北部首都の祭りの為供え、あるいは弘法大師（空海）の土棺説の民話として今に伝えられています。見た目は大変おいしそうですが、残念ながら食べることはできません。

南明山乗福寺

11 御堀
1305年（中世）

嘉元3年（1305）、22代弘福の創建と伝えられています。ここは後に勧善にもなった臨済宗の古刹で、室町時代の作とされる観音堂（国指定文化財）をはじめ、大内氏の絶頂期王子の南東宮や陶晋長、関東重弘、24代弘世の墓、みつが国の祀堂など、多くの文化財があります。境内には、上田鳳陽や服部東陽の墓もあり、秋の紅葉は見事です。

奇兵隊軍監福田俠平の墓

12 氷上／1868年（近世）

文政12年（1829）、吉敷郡後河原の長州藩士・中川嘉右衛門の次男として生まれ、のちに大津郡（現長門市）の福田家の養子となりました。維成当初から奇兵隊に入隊、後に山陵有那さとに軍監も務めました。高杉晋作の片腕として活躍し、慶應4年（1868）、晋作が最も信頼した男とも言われています。住居としていた氷上山麓に同志より建てられたこの墓には遺髪が納められています。

山根観音堂

13 氷上
江戸時代中期（近世）

このお堂は、氷上山興隆寺の観音堂を、明治17年（1884）に移築したものです。江戸時代中期の創立とされています。本尊の聖観音菩薩は、平安時代末の作で樹の一木彫り（寄木造りの反像）です。観音堂の後方の樹の大木には、江戸時代後期の行脚僧、天保上人の作とされる立木仏があり、今は大木に覆く包み込まれています。

大内氷上古墳

14 氷上
5世紀中後期（古墳時代）

山根観音堂の裏山にある、大内地区唯一の前方後円墳です。前方後円墳は市内でも大変珍しく、この古墳は県の史跡に指定されています。墳造は5世紀中後期で、全長38m、後円部35m、前方部4m之小型です。墳丘型整穴式石室を採用しながら山口地域の最式石棺の面影を残しており、古墳時代の地方と中央との関係を考えるうえで貴重な史跡です。

鮎川義介生誕地

15 氷上
1880年（近現代）

明治13年（1880）、氷上に生まれ、山口高校、東京大学工科を卒業後は、芝浦製作所（現東芝）に入社、後に日産コンツェルン（日産自動車、日立製作所など）を創設、戦後は参議院議員を務めるなど政財界で活躍しました。生誕地の碑は、氷上の東泉寺境内の民家の片隅にひっそりと建てられています。明治の元勲、井上馨は親戚にあたります。

杉孫七郎生誕地

16 氷上／1835年（近世）

天保6年（1835）、氷上の植木家に生まれ、後に杉家の養子となりました。文久元年（1861）には幕府の遣欧使節に随行し、長州ファイブよりも先に欧州へ渡り、元治元年（1864）の馬関戦争では副使として、高杉晋作、井上馨、伊藤博文とともに講和談判に臨みました。長州三傑の一人である彼の墓は、山口市宮香亭に見ることができます。

氷上山興隆寺

17 氷上／613年（古代）

推古天皇21年（613）、大内氏の祖聖徳太子の創建と伝えられています。天長4年（827）頃、11代吉村たとき能道開眼化（現下松市）の観音山から妙見社を勧請し、興隆寺を大内氏の氏寺に。妙見社も同神にしたと伝えられます。ここには、興聖寺の刀剣に始まり大内氏最後の当主31代義隆が寄進した梵鐘など、多くの文化財があります。

妙見社

18 氷上
827年（古代）

北辰妙見大菩薩を祭神とし、歴代当主により厚く崇拝されました。もとは、興隆寺の裏山にありましたが、開治に入り現在の地に移されました。拝殿は山口特有の筥拝殿形式です。境内にある梵鐘は、31代義隆が寄進したもので朝鮮鐘の特徴が多く加味されており、大内時代の工芸を代表する傑作として、国の重要文化財に指定されています。

妙見社上宮跡

19 氷上
827年～（古代時代～）

興隆寺境内の最高部氷上山の中腹にある大内氏の時代の遺構です。その時代は、一般の参拝は禁止されており、三月会で以当主と婦子が氏神祭の祓禊を行っていました。石段の手前には、高杉晋作や氷上山の名前の由来となった不動水があり、昭和61年（1986）の発掘調査では中世の製作の可能性のある高さ50cm程度の大変めずらしい勧光も確認されています。

上田鳳陽生誕地

20 氷上
1770年（近世）

明和7年（1770）、氷上の宮城家に生まれ、後に上田家の養子となりました。藩校明倫館で文学の修養に務め、修学を終えると27歳にして、中河原（公設市場跡）に山口講堂を開き教育に尽力、山口大学の基礎を築くリーダーとなった。生誕地は氷上橋北側に、寓居跡は御堀橋付近で、鎮魂碑は宮島町の外郎の近現場跡屋横に、そして墓は曹洞寺にあります。

植木平之允翁頌徳碑

21 新矢田
1934年（近現代）

植木平之允は、文久元年（1861）、萩に生まれたこと学博士で、改造山陵道を設計した人物です。母の実家植木家を継ぎ、大内村植木関学資金、植木旅行、理科室一種奇難など、大内村を郷里とし青年教育に尽くしました。昭和9年（1934）にはその業績を讃えるために顕彰碑が建てられました。児童クラブ3名が保証は後にちなんだものです。

旧大内村議会棟

22 高芝
1935年（近現代）

明治22年（1889）、町村制の実施により御堀、長野、矢田の三村が合併し、大内村が誕生しました。昭和10年（1935）、最初の庁舎の建築に際し、村民の寄附金12万円を投じて隣の山口市にもない鉄筋コンクリート造りの近代的な建物に生まれ変わりました。戦前の鉄筋コンクリート造りの村役場としては、県内唯一の現存例です。

大内歴史の交差点　宮島町

重岩

3 宮島町境

江戸時代の街道絵図「行程記」による、大内氏の時代、重岩は駅石町の市原比典氏に「応氏の、重ボニ一重ヒ一二重ヒ一と刻を彫大色ゐ」ことったいうことです。毛利氏の時代には、山口になり、萩でも初市に重ね餅を売るようになり、萩で江重ね餅に棒を刺し、その餅の穴を通して見ると、あの世にいる姿が見えると伝わっているとあります。

厳島神社

4 宮島町
1864年（近世）

応永13年（1406）、20代盛見が安芸の宮島から勧請し、現在の県庁の地に祀られましたが、元治元年（1864）社地が藩主の御屋敷となったことから、現在の地に移されました。この宝殿（多宝塔）は現存1ヶ、室町時代初期の造型とされ市の指定文化財になっています。

鰐石の蛍

5 宮島町境
室町時代～（中世～）

山口のサンジボタルは、24代義世が京都から招いた能楽の宴席を思めようと字治の蛍を取り寄せたことに始まると言われています。この付近一帯は、昔ふ伝説の蛍の滅が蛍となったとの言い伝えとともに、昭和30年代頃までマンジボタルの名所として親しまれました。昭和10年（1934）、国の天然記念物に指定されており、現在わが国ではは最も古い指定となっています。

鴻城錦絵

鴻城錦絵「重ね岩／図」

鴻城錦絵「厳島神社／図」

鴻城錦絵「鰐石川／図」

山口の名所を描いた版画で、山口市歴史民俗資料館に5枚残っています。その内3枚に「都石川の水は即ち西洋に到る」の漢詩が見える作品があります。大仕の「都」や「鰐」の字は、萩の吉田松陽先生の「今から彩り十年前、我住居の前を流れる小川の水は、西洋に通ずるかと思ひ、毎日、毎夜、時の風物などを眺め知ることが出きる貴重な問題である。」という文章を参考にして、この漢詩を修正したものと思われます。

鴻城偶成

鳳岳脉遠跨中国
鰐川水即到西洋
住肴肥腹酒洗肺
万地物天初躍年

鳳岳の脉は遠かに中国に跨る
鰐川の水は即ち西洋に到る
住肴は腹を肥やし酒は肺を洗う
万地の物天初めて躍るの年

鳳凰山の山並みは、遥か中国までつながる。
鰐石川の流れは、西洋に通ずる。
よい肴は腹を満たし、酒は肺の中まで洗う。
この世にあるものすべてが、初めて現れるような年である。

明治18年（1885）県下初の鉄橋「鰐石橋」

大正6年（1917）「コンクリート橋」（写真は昭和初年）

高杉晋作の漢詩

2 宮島町／1863年（近世）

文久3年（1863）6月、萩で隠棲生活を送っていた高杉晋作は、藩主毛利敬親より急遽、山口政事堂に呼び出され、そこで奇兵隊創設案を提案。その後、下関の防備を任されました。この漢詩は、その頃詠んだものと言われています。鳳凰山の山並みと、都石川の流れを眺めながら、人生の興出発を決意した若き晋作の、希望に満ちあふれた作品です。

山口市上下水道局電気室

8 宮島町
1935年（近現代）

この建物は、昭和10年（1935）、水道水を象頭山の配水池へ送水するためのポンプ室として建てられたものです。正面入口の石の階段やアーチ窓、スクラッチタイルの壁など当時もしのばせる唯一の建物で、国の登録有形文化財になっています。当時、山口市は上水道の供給開始に際し、その水源を大内村御堀（現宮島町）の伏流水に求めていました。

English page is here.

http://www.ohuchi-machizukuri.com